

## 編集委員会から

### データジャーナル

いままで、論文をオープンアクセス化することにより研究を共有する方向に進んでいることは、たびたび、指摘してきました。特に、公的資金で行われた研究は、社会説明責任として基本的にオープンアクセス（誰でもアクセスできる）が望ましいとされています。

しかしながら、オープンアクセス論文が最終形態ではないという意見があります。

例えば、第5期科学技術基本計画（2016-2020）の第4章 科学技術イノベーションの基盤的な力の強化（2）「知の基盤の強化」③「オープンサイエンスの推進」には以下の記載があります。

「オープンサイエンスとは、オープンアクセスと研究データのオープン化（オープンデータ）を含む概念である。オープンアクセスが進むことにより、学界、産業界、市民等あらゆるユーザーが研究成果を広く利用可能となり、その結果、研究者の所属機関、専門分野、国境を越えた新たな協働による知の創出を加速し、新たな価値を生み出していくことが可能となる。」

つまり、論文のオープンアクセスにとどまらず、データそのものをオープン化していくことにより、研究成果を広く社会に還元していくことができるという考えです。

では、どのようにデータをオープン化したらよいのでしょうか。利用者（ユーザー）からすると、定型で簡単に使用できるデジタルデータが望ましく、一部のデータは、既にデータベース化されており、日常的にデータが使用されています。しかしながら、多種多様なデータについては、どのような形で定型化（データベース化）するかを決めるのは難しいのが現状です。

そのため、定型化については考慮せず、ひとまずデータをオープンアクセスジャーナルに掲載するという考えが先行し、既にデータジャーナルというジャンルができています。大手雑誌社も出版しています。Data In BriefがElsevierから、Scientific DataがNatureから出版されています。

これらデータジャーナルに掲載された論文は、一見通常の科学雑誌の論文とそれほど違いませんが、結果と考察の章はなく、実験についての章で終わりです。ただし、Data in BriefですとType of data, How data was acquired, Data format, Data accessibility, Value of the dataが独立したパートで記載されています。Data in Briefに掲載されている多くの論文では、Data formatはfigure, graph, tableとなっており、そのままデータを活用することは難しそうです。

すなわち、現在はデータ記述様式よりも査読によるデータの均一性・信頼性を重視していることとなります。日本食品工学会誌にもデータジャーナルのアンケート調査が来たことがあります。

日本食品工学会誌もデータ論文を扱うべきかどうか、ご意見お聞かせください。

(山口大学 山本修一)